

後回し

菅田 忠志

「もうすぐお彼岸やけどこんどはどんな順番で墓参りに行くつか」

「小西のおはあちゃんが午後からお寺に行くので午前中を希望してきてたよ。菅田の方はこんどは午後になるわね」

朝からいそいそと出かけていた女房が、夕方帰宅するなり忙しそうに台所に立つて、「コトコトと手際よく夕飯の支度をしている。

そこに、いつも墓参りに行くたびに決める順番の話を切り出した。

「まあいいけど、墓参りのハシコも疲れるなあ。

かといって二日もかけて行くのもしんどいし…」

「自分の親でしよう。そんなに面倒くさがらないの…」

「いつもながら、こんな話になってしまっ。

- 1 -

その晩の倉庫には珍しく焼きマツタケが数切れずつ皿にのった。

「お！今夜はマツタケか？ ちょっと涼しい、久しぶりにあつかんじょうか」

「そうやね、今夜はビールも冷酒も出番はないみたいね」

聞けば某商店から「感謝展示会と昼食会」とやらに招待を受けて遊んできたという。マツタケはいつもそのときの手土産らしい。たいそうなことをするものだ。

「この費用も結局は販売価格にツケが回ってくるだろうから、その分みんなが豊つ時に割高になっているはず。」

「なんだかこの業界の戦略が見え隠れしてくる。」

「しかし、全然におつてこないなあ。国産じゃないなあ…」

「そりゃあそうでしょう、いくらなんでもそこま

- 2 -

では」

「そういえば、昔芋塚の奥にある道場の谷めいぞうでテントを張ったとき、すべそぼぼポンポンにおもちゃで探してみたらあるわあるわ…。急ぎょママシタケギンまいの献立になったことがあった。懐かしいなあ。あのあたり今はどうなっているんやろ」

「時代が違ってしょ。ただ二度いって見たわ」
「あ、はすなにもやろ。まあおこいは無さげや、ママそつちから後回しにしてて喰ひか」

「子供みたい…。けど、誰でもそつちやいママはあ、あ、あ」

「おーい、ママシタケの話よりおれ達の墓参りの話が後回しになって、まだ決まってるやないぞー」
あれあれ、あの世から催促されてしまった。